『優美な風貌』 ~ 日本の象徴の富士山 ~

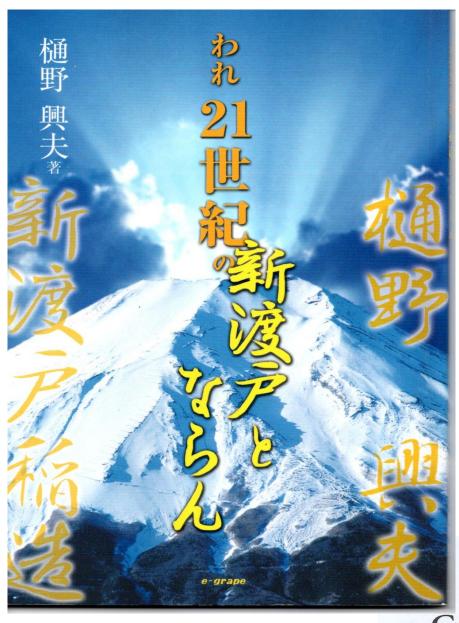
知的協力委員会』の再興の時であろう。

2024年12月11日は【『東久留米駅 ー>ひばりヶ丘駅 ー>池袋駅 ー>新宿駅 ー>中野駅 ー>新渡戸稲造記念センター ー>中野駅 ー>御茶ノ水駅 ー>順天堂大学 ー>本郷3丁目駅 ー>池袋駅 ー>ひばりヶ丘駅』の旅】であった。 車内から観る【『優美な風貌で、日本国外でも日本の象徴』として知られている日本最高峰の雪の富士山(3776.12m)】(画像)には心が慰められた。

癌研究会癌研究所での発がん研究(化学発がん) —> Albert Einstein College of Medicine (ニューヨーク)での(ウイルス性肝がん)研究 —> Fox Chase Cancer Center(フィラデルフィア)での (遺伝性腎がん)研究 (画像)—>『がん哲学=生物学+人間学』の提唱 —> 順天堂大学での(『環境発がん:アスベスト・中皮腫外来』&『がん哲学外来』)—> そして、病院外での『陣営の外=がん哲学外来』へと展開した。 今朝、最先端の2つ英語論文の査読を依頼された。 人生日々勉強である。

筆者は、『日本国のあるべき姿』として『日本肝臓論』を提案している。【肝臓は、異物に対しては寛容性をもつ。日本国も肝臓のような国になれば、世界から尊敬されるという趣旨である。 人間の身体と臓器、組織、細胞の役割分担とお互いの非連続性の中の連続性、そして、障害時における全体的な『いたわり』の理解は、世界、国家、民族、人間の在り方への深い洞察へと誘うのであろう】。新渡戸稲造(1862-1933)は国際連盟事務次長時代に、『知的協力委員会』を構成し知的対話を行った。 そのメンバー中には、当時の最高の頭脳を代表する物理学者の Albert Einstein(1879-1955)、Madame Curie(1867-1934)もいた。 今こそ国際貢献として、『21世紀の

2024年12月13日は、新渡戸稲造を師と敬愛する南原繁(1889-1974)の研究会(Zoom 方式・対面方式の会場 学士会館303号室)に出席する。筆者は、南原繁没後30年にあたる2004年にスタートした南原繁研究会の3代目の代表を仰せつかっている。今年(2024年)は【南原繁研究会発足20周年、さらには南原繁没後50年】でもある。『人間として行為の継続の大切さ』を痛感する日々である。

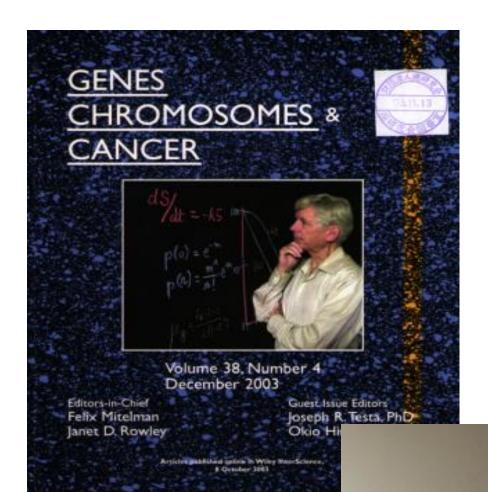


Cancer Philosophy

Seeing Society from the Views of a Cancer Cell



Okio Hino, M.D., Ph.D.



WILEY-LISS

Tsc2 gene mutant (Eker) rat